町にきたヘラジカ

フィル=ストング さく

グルト=ビーゼ え　せたていじ やく

NDC九三三

新しい世界の幼年童話・15
町にきたヘラジカ
フィル＝ストング

訳者★瀬田貞二
発行人★渡部ひろし
編集人★石井和夫
印刷★壮光舎印刷株式会社
発行所★株式会社**学習研究社**
東京都大田区上池台四の四〇の五
振替東京八―一四二九三〇

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©1969
無断複写複製(コピー)を禁ず

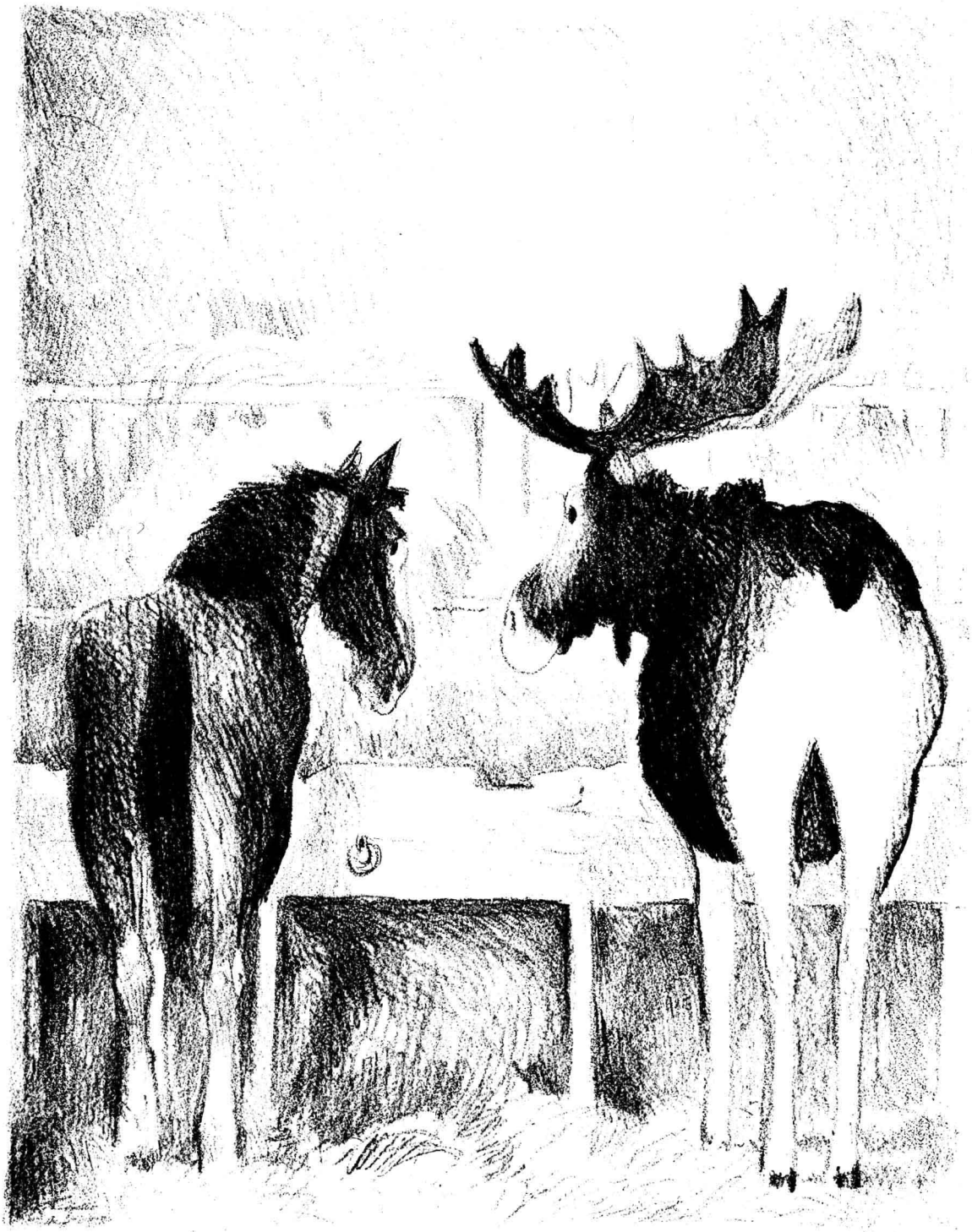
5228

＊この本の内容に関する問合わせ，製本上のミスなどがありましたら，下記あてにお願いします。
文書は(〒145)東京都大田区上池台4－40－5 学研 ユーザー・サービス部「児童図書」係
電話は，東京(03)720－1111(大代表)

Printed in Japan　＊定価はカバーに明記してあります。

町(まち)にきたヘラジカ

フィル＝ストング・さく
クルト＝ビーゼ・え
せた ていじ・やく



もくじ

1 シカがり……5
2 ヘラジカのボーン……16
3 ヘラジカと大男……23
4 ヘラジカをどうするか？……44
5 あたまにきた町長さん……54
6 おしかけきゃく……70
7 おいで、ボーン……79
8 春のさわぎ……93
9 そして、冬……100

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

HONK: THE MOOSE

Copyright 1935 by Phil Stong
Original English edition published
by Dodd, Mead & Company

Japanese translation right arranged
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

1

シカがり

なかよしのワイノとイバールは、その日かりにでて、一日じゅう一ぴきのシカにも、であいませんでした。クマさえ、見かけませんでした。イバールは、じぶんではたしかに、連発空気銃でウサギをしとめたといいましたが、ろんよりしょうこ、手になにもぶらさげていないのですから、しかたがありません。

ふたりは、ビロラの町のうしろにつらなる「くろがね山」のなだらかな丘を、ヒッコリー製のスキーにのってすべりおり、町のレンガほそうの通りにつくと、スキーをはずして、ゆっくりあるいてかえりました。

「くろがね山」の山やまは、赤やむらさきの鉄鉱でできていて、その上には、こんもりと、モミやエゾマツやスギなどのときわ木の森がかぶさっています。そのみどりにかこまれて、山みちは、夏は鉄分で赤く、長い冬は（ここは北国のミネソタですから）雪で白くいろどられます。

イバールのかみのけは、とてもあわい色で、白っぽく見えます。イバールは、十さいになるこのとしまで、いつもにこにこしていましたから、目じりに二本ずつ、小さなわらいじわがよって、おかげでますますわらいがおができやすくなりました。

ワイノのほうは、まっくろなばさばさがみで、あたまはバスケットボールのようにまんまるです。そしてワイノは、イバールのおもいつくことには、なんでもさんせいです。

「シカをうったら、そのシカ、うちへかえれないよ、な。」と、イバールがいいました。

ワイノは、こっくりして、「かえれないよなあ。とにかく、シカって、いいやつだよ、な。かまないもん。」と、いいました。

ふたりは、スキーをかたにかついでいました。ワイノのスキーのさきにたまっていた雪がとけて、ワイノの半オーバーのえりくびにおちました。

「ひえーっ！　こいつ！」と、ワイノは、スキーにもんくをいって、それからイバールに、「じゃ、バイバイ。ここからかえるよ。」

「よう、うまやによってけよ。スキーに油をぬって、まぐさの上でやすもうよ。」

イバールのとうさんは、ビロラの町で貸しうまやをやっています。鉄鉱山や、材木のきこり場からくるウマとロバをあずかるのです。そのうえ、獣医さんなので、病気にかかった家畜のめんどうもみます。

ワイノは、ちょっとかんがえてみました。「よし、きめた。あした、どこへかりにいくかも、そうだんしよう。」そういって、そばのへいを空気銃でピシッとうちました。「こんなぐあいに、でかいヘラジカをやっつけていたらなあ。」

でもこれは、ほんきではありませ

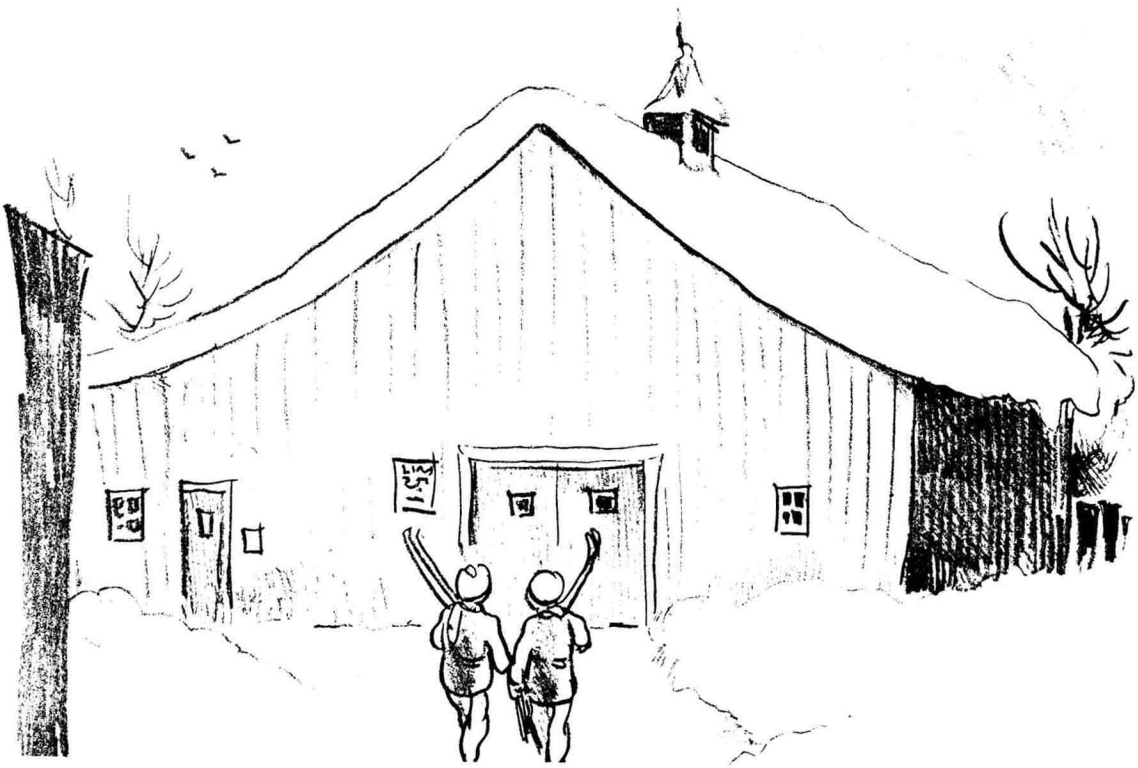
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ん。ヘラジカときたら、うんと大きなウマよりずっと大きいし、はりだしたつの大きさは、かまど台ぐらいありますから。たとえ空気銃がきけんなしろもので、ひとをとびあがらせたり、わめかせたりするとしても、ヘラジカをとびあがらせたりするわけにはいきません。ヘラジカには、うたれたことが、わかるかもしれないし、わからないかもしれません。わかったとしたら、たちまちふたりとも、一本の木へ、それともべつべつの木へ、よじのぼらなければなりませんもの。

「だんろの上に、あいつのつのがかざれたのになあ。」と、イバールがいいました。

ふたりは、すこしさむくなってきました。この子たちのとうさん、かあさんたちは、ずっと北極にちかいフィンランドからアメリカにきて、「くろがね山」におちついた人たちです。けれども、ここでも、かんだん計はれい下三十度になりますし、シュペリオ湖からミサーブ山脈をこえてふきおろす寒風があります。ですから、あたたかいうまやにはいって、その事務室のストーブにあたるのは、なによりです。

「とうさん、どこかへまわってるんだな、きっと。」イバールは、ストー



ブがあたたかいので、うわぎのボタンをはずしながらいいました。そして、ぼろぬのと馬具用の油のカンをもってきて、ふたりは、スキーの手いれをはじめました。

「でも、なあ。」と、ワイノは、ゆめみるような口ぶりでいいました。「やっぱり、ぼくがうったのが、でかいヘラジカだったらなあ。」

イバールは、スキーをおいて、空気銃をにぎりました。「いいか、ヘラジカに、こうしてやるんだ。」こういってイバールは、事務室のドアをあけて、ウマたちがもくもくと草をたべているかこいのあいだの、くらいろうかめがけて、できるだけすばやく引き金をひいて、三ぱつうちました。

そのとたんに、とてもものがなしい音が、おこりました。それは、「ブォォーン、ボーン、ブォォーン！」と、つづきました。

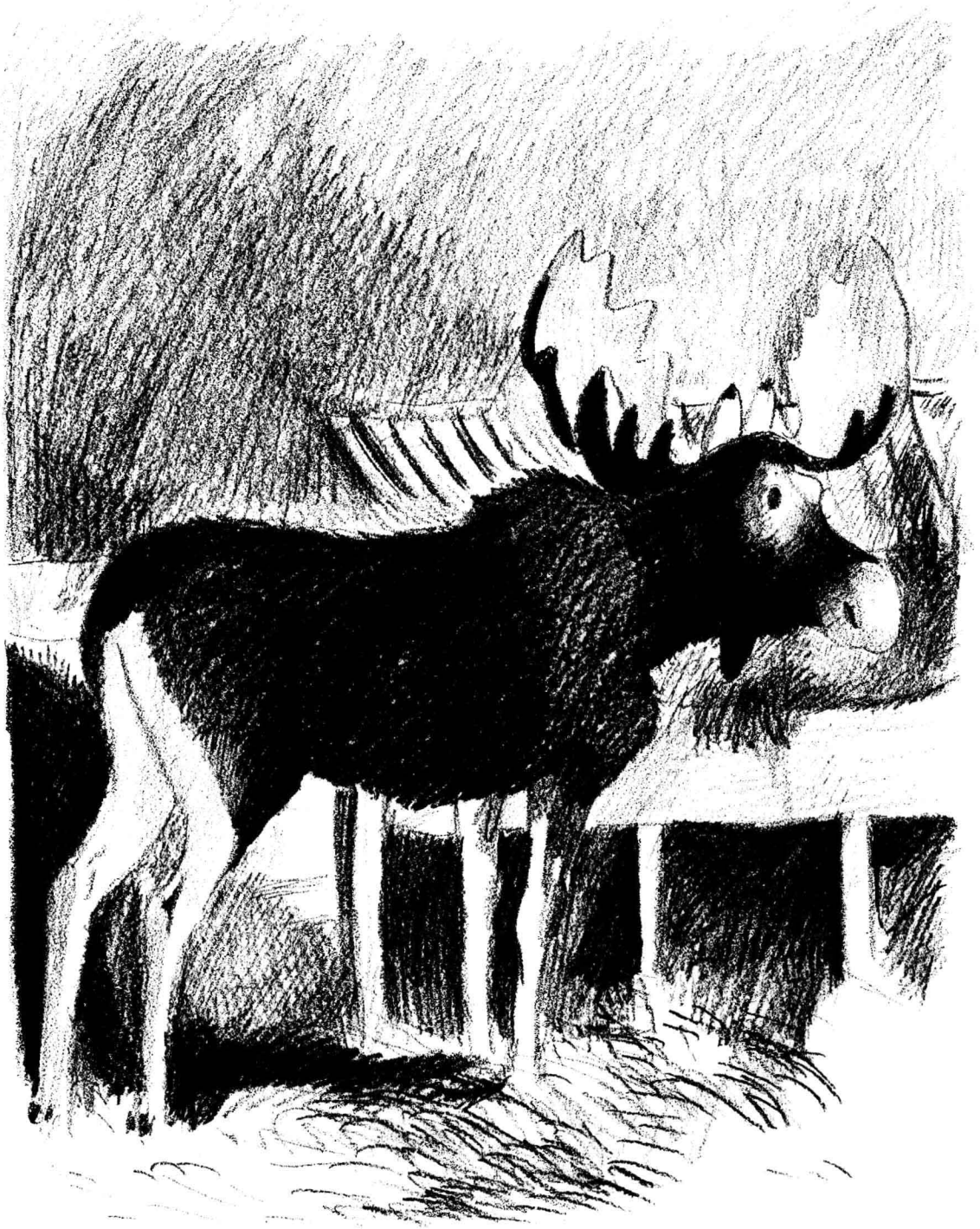
ふたりの男の子たちは、銃も、油も、ぼろきれも、なにもかも、とりおとしました。

「うえーっ！　ありゃ、なんだろ？　イバール。」

イバールは、ぴょんととびあがりました。でも、すぐにイバールのゆうきは、もどってきました。いや、もどってきたような気がしました。

「あれは――あの音は――自動車みたいだったぞ。」
「自動車なら、空気銃をうったって、音はださないさ。」と、ワイノ。
「自動車のラッパをうったのかも、しれないぞ。」
「でも、ながいこと、なったぜ。」
「そうだな。」と、イバールも、自動車でないことをみとめました。それから、むねをそらせました。ぼくは、スオミだぞ。スオミは、いさましいフィンランド人のことだぞ。――そしてイバールは、フィンランドの伝説の英雄ワイナモイネン（フィンランドにつたわる叙事詩『カレワラ』のなかにでてくる英雄鍛冶屋。ゆうきがあって、大ぼうけんをする）のことを、おもいだしました。
「ぼくが、正体を見つけてやる。」
こういってイバールは、いさましく、ろうかの電気をつけにいきました。
「ヘラジカだとおもうな。」と、ワイノがそっといいました。
それでも、あとからやってきて、イバールのかたごしに、ろうかをのぞきました。
イバールが、スイッチをいれました。

それは、
ヘラジカでした。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com